

小人のプームックル

エリス・カウト作 松尾幸子訳



児童図書館 文学の部屋

評論社

評論社の児童図書館・文学の部屋

商標登録番号 第730697号・第852070号 登録許可済

児童図書館
文学の部屋

小人のプームックル

昭和49年5月25日 初版発行

¥ 890

訳 者 松 尾 幸 子

発 行 者 竹 下 晴 信

印刷所 三 倉 印 刷

製本所 神 田・加 藤 製 本

発 行 所 株式 評 論 社

(〒101) 東京都千代田区神田神保町 2-16

電話代表(265) 1 9 6 1

振 替 東 京 7 2 9 4

検印省略

落丁・乱丁本は本社にてお取りかえいたします。

(A-1)

小人のプームツクル

エリス・カウト作

まつおさらこ
松尾幸子訳

さし絵
バーバラ・V・ジョンソン



PUMUCKL SPUKT WEITER

by

Ellis Kaut

Illustrated by Barbara von Johnson

Original German language edition published

by Herold Verlag Stuttgart

Copyright © 1966 by Herold Verlag Brück KG.,

Stuttgart S, Alexanderstraße 51

Japanese translation rights arranged through

Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo.

も
く
じ



プームツクルと鼻かぜ……………11

毛糸のセーター……………40

はじめての雪……………72

クリスマスのおくりもの……………111

ふしぎなぶらんこ……………147

せとものの小人……………171

こんにちは、みなさん！／203

訳者あとがき／206

小人のブームツクル

松^{まつ}尾^お幸^{さち}子^こ 訳
エリス・カウト 作

コーボルト小人というのは、人囀―をからかうことの好きな、目には見え、小サな男ノ子のこトです。ソシテプムツクルはそノよなコーボルー中人でした。ある日ノトモ、プムツクルは家具師のエーダー親方のニカワッポツクツについてしまいました―？それでこウいうことにナツテしまッダノデシタ。つまりプムツクルは見えるようになつたのです！―けれどもそれは家具師のエーダー親方だれで、しかしモ近クにはかのヒトがだれもいナいとキにたケのこと。みづそれがつま

小人キマリだッタのです。

コーボルト

もしもプームックルがそばにいたならば、この本はぜんぶ、こんなふうになってしまったことでしょう。プームックルは、——まあ、コーボルト小人というのはみんなこうなんですが——文字や行間や単語をぜんぶ、めちやくちやにしてしまうのです。そしてそれと同時に、えんぴつやボールペンや消しゴムなどが残らず姿を消してしまいます。ところが、ありがたいことに、この時プームックルはエーダー親方の仕事場にいましたし、おまけに鼻かぜをひいていました。プームックルは、この家具師の親方であるエーダーのところに、どうしてもどまっていなければならないのでした。それはコーボルト小人のきまりでした。この、小さな、もじやもじや頭のプームックルの姿が見えるようになってしまったのも、もとはといえば、その、コーボルト小人のきまりのせいでした。つまり、プームックルはうっかりして、エーダーのにかわつぽにくつついてしまったのです。そうなたら、じたばたあばれたってどうにもなりません。——助けてもらわなくては、もはや、にかわつぽから離れることはできませんでした。こうして、プームックルの姿はひっきりなしに見えるようになってしまったのです。

このことをどちらが、つまり、お人好しの年とった家具師の親方か、あるいは小さなコーボルト小人か、どちらの方がよけいにおどろいたのかは、むずかしくて言えません。最初

の瞬間は、ふたりとも、それが起こらなかったことにしておけたらと思いました。しかし

——コーボルト小人のきまりがそれを許しませんでした。つまり、姿の见えない生き物は——と、そのきまりには述べられていました——人間の使うものにくつついてしまった場合、あるいはまた、人間の持ち物にはさまれてしまった場合、その姿は見えるようになる。もちろん、これは、その物を所有する人間にのみかわることである。

はじめ、親方はびっくりして、プームックルの姿を見ることのできない、別の人のところへ、おおいそぎで行くようにと提案しました。しかし、そのことについてもコーボルト小人にはきまりがありました。つまり、その、目に見えないものは、だれかに一度でも見られてしまったら、その人のところにとどまらなければならないのです。

それはまったくたいへんなことでした。プームックルは、そうなるとすぐさま、できにかぎりのものをぜんぶかくすことに熱中しました。ねじくぎやくぎをほうり投げ、ハンマー、やつとこ、ドリルをどこかへやってしまいました。もしも、そうです、もしもこの小さなコーボルト小人がこんなに愛くるしくなかったら、これはやりきれないことでした。エーダー親方はどうしようもありませんでした。親方はプームックルのことを心から好きだったのです。それにエーダー親方の心は広く寛大でした。ともかく、たいていの場合

は、です。

それで、この時から二人は、露路裏ろじうらの、小さな、いくらか時代おくれの家にいっしょに住むことになりました。その家は下が仕事場、二階かいがエーダーの住まいとなっていました。仕事場の前の中庭なかにわには栗くりの木が一本ありました。それは表おもての家と裏の家にはさまれて、すこしばかりあわれな生活を送おくっていました。けれどもプームツクルはこの木が大好きでした。この木の幹みきは船ふねのマストを思い出させる、というのです。

ところで、この「思い出」というのはあまりはつきりしたものではありませんでした。つまり、プームツクルが船のマストをみたのは、もうずっとずっと前のことでした。要するに、そうしていたら、というはなしなのです。ですが、ともかく祖先そぜんは、むかし帆船はんせんに住んでいた、あの有名な船ふねの小人でした。この小人もちろん、ひとの目には見えない小人でした。姿を見られるということは、コーボルト小人にとってはほんとうにたいへんなことでした。つまり、姿の見えないものには、姿の見えるものがわずらわされるようなことは起こらないのです。たとえば鼻はなかぜがそうです。そのようなものがあるということさえ、プームツクルは少しも知りませんでした！　ところが、よりによってプームツクルの身みにそのようなことが起こることになったのです。それは次のようにして起こりました。

プームツクルと鼻かぜ

雨のふる、ある秋の日のことでした。エーダー親方は仕事場ではたらいにいました。屋^{ひろ}間^まなのに薄暗^{うすぐら}く、親方はゆううつな気分でした。親方は雨の日が大きらいだったのです。プームツクル・コーボルトの方はそれとはまったく反対でした。雨が窓^{まど}ガラスにぶつかって、たくさん水玉ができました。それが追^おいかけてこをしながら流れおちてゆきます。そのようすを、プームツクルは大喜^{およろこ}びでながめました。きらきら光る雨だれも、プームツクルは好きでした。庭^{にわ}の、秋らしくもう葉^はの落^おちてしまった栗の木の枝からしたたる雨だれ。それは、ぬれて光っている石の上にぼたんぼたん^おと落ちていました。コーボルト小人は、何か特別^{とくべつ}に気に入ったものがあると、いつも詩^{うた}を作りました。

「どこもかしこも水だ

どこもかしこもしめっばい

とてもとても愉快ゆかいっぽい」

「愉快っぽいなんて、正しいことばじゃないよ。」とエーダーは文句もんくをつけました。

「いいさ、たぶん、正しいことばではないだろうがね。でも、そのかわり詩的しできなことばだよ。」とプームツクルは言い張りはました。しかしプームツクルは、すこし考えてみました。そしてそれから顔かおをかがやかせて言いました。

「わかった！　こうがいいよ。どこもかしこも湿気しめりけだらけ、とても愉快ゆかいなことだらけ。」
エーダー親方は窓の外をちらと見てつぶやきました。「愉快だなんてとんでもない。こういういやな雨の日にはいつもリューマチがでて痛いたむんだから。」コーボルト小人はリューマチなどにかかりませんから、その苦くるしみなんていうものはぜんぜんわかりません。それでプームツクルは、雨のことをさらにかばって言いました。「ねえ、雨はとってもすてきな水たまりをたくさん作るんだよ。水たまりに入ったことある？」

「よけることができれば、水たまりになんか入らないさ。」

「入るようになきゃあ。みんな水たまりに入るんだよ。」

「みんな？」

「といっても、大きいひとはそうでもないけれどね。でも、小さいひとはみんな入る

よ。」

「ああ、こどもたちのことか。そうだろうね。そしてあとで、ひどい鼻かぜをひくんだよ。」

コーボルト小人はそんなことをぜんぜん気にしていませんでした。それどころか、目がかがやかせて熱心^{おつしん}に言いました。

「ぼくも水たまりに入りたいよ。もともと、ぼくは船に住む小人の子孫^{しそん}なんだからね。みんな海の上で生活していたんだよ。だからぼくは水たまりが好き^すなんだと思うな。」

「だが、水たまりに入ることには反対だね。きつと、びしょぬれになるだけだろうし、それに鼻かぜはほんとうにいやなもんだよ。」

「ぬれやしないよ。ぼくの姿は目に見えないんだから。姿の見えないものがぬれたのを見たことあるかい？」

「ないけれど、おまえは、わたしがおまえを見ているあいだは、結局^{けつぎよく}のところ、わたしの目には見えるのだからね。目に見えていれば、人間の身^みに起^おこることはぜんぶ、おまえの身にも起こるってことをよく知っているだろ。」

「でも、ぼくが水たまりに入っているとき、あんたが見ていなければぼくの姿は見えない

いんだし、見えていなければぬれないだろ、ぬれなければ寒くもないし、寒くなければ風邪はふかないよ。かんたんさ。」

「風邪はふくんじゃあなくてひくんだよ。わたしは目かくしをしているわけにはいい。窓の外をちらとでも見てしまったらもうおまえのことが目に入ってしまう。そうしたら、わたしたちとはとにかく困ったおくりものをもらうことになるわけだ。」

「鼻かぜって風邪のようなものだと思ってたけれど、おくりもののようなものの。鼻かぜって、いったい何のこと？」

プームツクルはねじの万力からひよいとびおりました。そしてエーダー親方がちょうど手にした板のうえにぼんととびのりました。このようにしてコーボルト小人が親方の前に立つたびに、親方はもうなんども思ったのでした。このもじやもじや頭のかわいらしい男の子を、だあれも見ることができないなんて、なんとしても惜しいなあ、と。

「鼻かぜってなあに。」とプームツクルはくりかえしました。

エーダー親方はほほえみました。「鼻かぜとはひどくいやなものさ。くしゃみが出るし、はなは出はじめるし。」

プームツクルは鼻をつまんで断固として言いました。「鼻が出るなんてことはぜったい

にないよ。鼻には足がないし、くっついてるからね。」

プームックルは鼻を引っぱってみせました。「ほらごらん、こんなにしっかりくっついてる。」

「そんなことは何もならないだよ。はなは出るのさ。」

プームックルは足をばたばたさせて言いました。「ちがう、ちがう、そんなことないよ。そうだとしたら、どこかで鼻が散歩さんぽしているのを見たことがあるはずだよ。すくなくともこどもの鼻がね。こどもはみんな水たまりに入ってぬれるんだからな。」

「いいから、言うことをききなさい。外の水たまりに入るんではないよ。」

プームックルは窓のふちにとびあがってぶつぶつと文句もんぐを言いました。「あーあ、ちょうどの窓の前まへのところに、いちばんすてきな水たまりがあるのにな。板いたぎれもおちている。あれを浮かうかばせられたらなあ。小さな石ころがたくさんあるよ。水たまりに投なげて遊あそべるのになあ―それから―それから―」プームックルは悲かなしくなつて窓ガラスに鼻をべしやんと押しつけました。

エーダー親方はそれを見て、自分がこどもだったころ、よく水たまりに入つたことを思い出しました。そして今となつてはなぜだかよくわからないのですが、そのときはそれが